

## ネットワーク初心者のためのホームページ構築法

—文学部ホームページを題材に—

文学部人間学科心理学コース

社会環境科学研究科 中崎 崇志

(nakazaki@kenroku.kanazawa-u.ac.jp)

### “文学部”とコンピュータ

“文学”という言葉にはどこかアナログの響きがあって、デジタルの最先端をいくコンピュータとは、どうもなじみにくいような印象を与える。しかし、文学部に属するコースであっても、今やコンピュータの利用は不可欠になりつつある。文学部における利用で真っ先に思いつくのは、文章や論文を書くためのワープロソフトだろうが、それだけではない。文学部にはいろいろなコースがあって、そのコースによって様々な使い方がある。例えば、筆者が所属する心理学研究室では、パソコンの最も重要な働き場所は心理学実験である。描画ソフトを用いた実験用の刺激(被験者に提示するもの)の作成、自作の実験プログラムや専用のアプリケーションを用いた実験の実施、統計ソフトやグラフ描画ソフト、表計算ソフトによる実験後のデータ処理など。実際にワープロでレポートや論文を書くよりも前の段階の方が、パソコンの活躍の舞台は広い。最近ではパソコンがユーザーインターフェイスの一部としてシステムに組み込まれた装置もいろいろある。心理研には専用にチューニングされたディスプレイを備えたデジタルタキストスコープ(10ミリ秒単位で刺激を制御できる瞬間提示装置)やパソコンとビデオデッキを連動させる運動解析システムなどがある。もちろん、このような特殊な装置はどこにでもあるわけではないが、画像の処理や統計処理などは文学部の他コースでもおこなわれているはずである。

こういったパソコン単体での使い方、つまりスタンドアロンの用途だけでなく、ネットワークの端末機としての利用も一般的になりつつある。統計処理のために大型計算機へログインしてSASを使う、というようなことは以前からおこなわれているが、最近では、国内や海外で開催される学会やカンファレンスの情報を、WWW(World Wide Web)で入手するなど、よりネットワークの威力が発揮されるような使い方も可能になってきた。中には参加申し込みや予稿集の原稿の発送までネットワーク経由で求める学会さえある。専門誌を見てカンファレンスの情報を集め、郵送でパンフレットを申し込む、という手間がかからなくなった。特に海外の学会の場合にはこの省力化のメリットは大きい。ネットワークの研究用途での利用ということなら、この他にも、研究についての情報をメールで交換したり、WWW上で公開されている様々な情報検索ページや研究用データベースを利用するなどが挙げられる。すべてネットワーク環境の整備のなせる技だ。

こうしたネットワークインフラの整備によって、現在はコンピュータを単体で使用してきた時代から、ネットワークベースでの利用への移行が加速している。“ネットワーク”と一口に言っても、学内LAN(Local Area Network)や企業内LANなどの規模の小さいものから、ネットワーク相互のネットワークであるインターネットのような世界規模のものまで様々だ。国内だろうが海外だろうが、ネットワークのどこかの端につながっていさえすれば、自分が情報の受信側にも発信側にもなれる。

このような情報発信の基盤として、ここ数年来、HTML(Hyper Text Markup Language)を使ったホー

ムページによるWWWでの情報配信が最も注目を集めてきた。日本では、WWWが注目を集め始めた時期から、インターネットの利用者が増加したと言われている。つまり、この時期からネットワークへ参加し始めた初心者の多くが、インターネット利用の目的としてホームページの閲覧に注目しているということである。ホームページの閲覧、すなわちwebブラウジングとインターネットはそれぐらい密接な関係にあるものと言える。

本稿では、この情報発信基盤としてのホームページに注目し、ホームページの作り方について基本的な事柄を解説すると共に、研究室のコンピュータから文学部LANへ接続する場合を例にとり、金沢大学の総合情報処理センターを利用してホームページを開設する場合の基本知識について解説していくことにする。ただし、ソフトウェアの使用法などは取り上げず、Windows環境でもMacOS環境でも共通して使える知識について解説していくことにする。

## ホームページを持つことの魅力

例えば金沢大学の学内サーバを使って研究室を紹介するホームページを作るとしよう。WWWサーバ、すなわちホームページをWWW上に公開するために必要なハードウェアの管理・運営は情報処理センターやその部局で担当する誰かに任せることになるが、そのサーバの中に存在するホームページは、作成者自身が管理・運営していくことになる。ホームページは、研究室のコンピュータで作成したファイルをWWWサーバに送るという方法で公開するからである。つまり、研究室の教官・学生のナマの声を、研究室以外の誰かの手を経ずに反映できるのである。さらに提供者自身が作成者を兼ねるのだから、情報の更新のタイムラグが少なくなる。この情報提供の直接性と情報更新の即時性がホームページの魅力と言えよう。

また、ホームページ上では作成者自身のやり方で情報の整理と提示がおこなえる。つまりHTMLという形式さえ守れば、ホームページのデザインには制約がない。作成者あるいは研究室の個性が反映されたホームページを作ることができる。印刷物になったパンフレットでは、情報は限られたスペースでしか載せることができないが、ホームページ上では自分たちが提供したい情報を自分たちが考えた形で提供していくことができる。さらに言うならば、パンフレットにはまず載るはずのない、大学院生各自の研究テーマや意見、考え方までも紹介することができる。これから専門のコースを選ぼうという学生や、大学・大学院を選ぼうとする人々には、その研究室で実際にどんな研究がおこなわれているのかを知ることも重要だ。また同じ研究分野の人との情報交換の場としても機能する。ホームページ上ではそういう情報を自らの手でデザインして提供できる。

こうして公開されたホームページは、あちこちから自由に閲覧できる。閲覧したい人は、どこからでもインターネットに接続して、自分の手でいくらでも情報収集ができるようになってきている。私事だが、私の出身高校には、私が在学していた当時にはコンピュータ室などなかったのだが、つい先日、今その高校に勤務していらっしゃる先生から頂いたメールでは、現在はコンピュータ室ができているだけではなく、今年度に入ってからネットワーク環境を整備し、同時にパソコンそのものも更新してDOS/V機を導入したのだそうだ。今は、生徒会の役員さんが頑張って高校のホームページの更新作業を続けている。このようにコンピュータは、小・中・高校へ、そしてさらに家庭へと広く普及していつている。現在、コンピュータによる情報の送受信の環境はどんどん整いつつある。

## ホームページは難しい？

ホームページを作るとき、いちばん敷居の高さを感じるのはどういう点だろうか。「作るのが難しそうだ」とか「ホームページ上で提供する材料がない」といったところではないだろうか。材料の問題は各個人が考えることであって、外からとやかく言えることではないが、あえて言うなら“作って人に見せられる何か”を選べばいい。例えば研究室のホームページを作る場合なら、研究室紹介、コースの教官のコメント集、そのコースと縁の深いホームページへのリンク集など、考えればすぐにいくつかのアイデアは浮かんでくる。

さて、問題は「中身は思いついたけれど、作り方がわからない」というときである。解説書などにはよくわからない単語があれこれ出てくるし、何をどうすればホームページになるのかイメージがつかめない、などということもあるだろう。しかし、これもホームページが普及し始めた頃に比べればぐんと簡単になってきた。以前は、ホームページを作るためにはHTMLの“タグ”という一種の命令とその記述ルールを覚えて、テキストエディタなどで文章を記述しては、そこへタグをつけていくという作業が必要だった。しかも、作成中のファイルはWWW上で見る形とは違い、文章とタグが並んだだけの文字列の塊であるため、実際にホームページになったときの形を確認するのに手間がかかった。今はそんな作業はほとんど必要ない。HTMLファイルを作成するだけなら、専用のホームページビルダーとかHTMLエディタと呼ばれるソフトを使うことができる。Windows環境でもMacOS環境でも、数種類が市販されている。HTMLエディタを使えば、WWW上で公開するときの形そのままにHTMLファイルをデザインすることができるし、タグを覚える必要もない。写真や画像を貼りつけるのも簡単だ。デジタルカメラで撮影した写真を、そのまま貼りつけることもできる。昔の写真でも、ポジがあればスキャナーで、ネガしかなくてもフィルムスキャナーで読み込めば、デジタルデータとしてホームページに貼りつけられる。16色から256色で表現できるレベルの画像であれば、GIFファイルにすればいい。ホームページ上で見たときにじわじわと現れてくるインターレースGIFや、小さなキャラクターがちょこまかと動くGIFアニメーションなどを貼りつけてもいい。自分で絵を描いたり写真を撮ったりするのは苦手、という人には、著作権フリーの素材集を使うという手もある。とにかく、HTMLエディタと、描画ソフトやアニメーションの編集ソフトがあれば、一通り見栄えのするホームページを作ることができる。

もちろん、基本的なタグづけのルールさえ覚えてしまえば、テキストエディタで打ち込んでいっても構わないし、HTMLエディタがサポートしないタグを、HTMLエディタで作成したファイルに追加していくこともできる。それに、画像を貼ったりするだけではおもしろくない、もっといろいろ凝ったことをしたい、という人もいるかもしれない。“凝ったホームページ”には、CGIやJavascriptなどを初めとする複雑な技術がいろいろと盛り込まれているのだが、これらの技術の中にはHTMLエディタだけでは記述できないものが多い。これらの技術を使うには、HTMLエディタとテキストエディタを併用する必要があることもあるし、当然これらの技術をホームページ上で実現するための知識も必要になる(特にCGIの場合は、C言語やPerlなどのプログラミング言語の知識まで必要)。書店のインターネット関連のコーナーには、“CGI”や“Java”という単語が入った書籍が数多く並んでいる。これらの書籍を参考にすれば、いろいろと手の込んだホームページを作ることができる。ただし、CGIやJavaを多用すると必然的にホームページが重くなり、サーバからの転送に時間がかかることになる。CGIやJavaをたくさん組み込めば、格好いいホームページは作れるが、読み込むのに何分も待たされることになる。また、それらをブラウズするには、ブラウザソフトをそれらの機能をサポートする最新のバージョンにしなければならない。古いバージョンのブラウザを使用した場合に、何が載っているか全然わからないことになるのである。どうしても必要でないかぎり、CGIやJavaを組み込まずに作った方が、アクセス

に時間のかからないページを作ることができる。

そういう意味で、CGIやJavaの使用は、基本的なホームページの作成法からははずして考えてもいいだろう。本稿では、ごく基本的なHTMLファイルと画像ファイルなどの組み合わせだけのホームページ作成を目指す人を対象とした解説をおこなっていくことにしているので、上記のような複雑な技術については取り上げない。これらの技術を使ってみたいという人には、専門書にあたることをお勧めする。

## ホームページ開設の手順

ここから先は、具体的に何をどうやればホームページを開設できるかを説明していこう。細かなソフトの使い方などは、各自が使うソフトのマニュアルにしたがってもらうとして、その他の間違いやすい事柄や、開設のために必要な手続きなどを説明していくことにする。以下に示す一連の手順は、金沢大学総合情報処理センターのWWWサーバを使う場合の説明であって、個人的にプロバイダと契約してホームページを開く場合は(2)と(3)の手順が異なる。また、身近に詳しい人がいれば、自分である程度勉強してから足りない知識を補ってもらうようにすればよい。丸抱えで教えてもらっても、いつもいつも助けてもらえるとは限らないし、後の更新作業を自分の手でできなくなったりするので、まず自分自身で勉強することを心がけよう。

### (1)中身を決める。

公開するトピックを考えるだけでなく、それがホームページで公開するのに適当かどうかもある必要がある。例えば、研究室のメンバーの紹介をするにしても、住所録のような個人データまで公開してもいいものだろうか。また研究室のメンバーに向けた連絡事項についても、ホームページ上のみのアナウンスで済むことだろうか。WWWはオープンである分、いつ、誰がアクセスするかわからないし、逆に誰もが確実にアクセスするとは限らない。やたらに個人情報を流すのも考えものだし、誰もが確実に目にしなければ困るような連絡は、研究室のドアにメモでも貼っておいたほうが確実に伝わるはずである。どんなトピックを公開するかは、このようなWWWの特性を考慮して選ぶべきだろう。

### (2)パソコンを学内LANに接続する。

ホームページを作って公開するためには、まずWWWサーバにファイルを転送しなければならない。情報処理センターのWWWサーバを利用する場合は、まず金沢大学のLANと研究室のパソコンを接続する必要がある。もちろん学内LANはインターネットにもつながっているのですが、きちんと接続できれば、インターネットへの接続も完了したことになる。学内LANに接続するには、情報コンセントとIPアドレスが必要になる。情報コンセントは、例えば文学部棟に張り巡らされたLANの端末である。IPアドレスはこの情報コンセントひとつひとつに割り当てられる。IPアドレスは、全世界でネットワーク上に存在するコンピュータ1台ごとに異なる番号が割り当てられるので、自分で勝手に番号を決めるわけにはいかない。IPアドレスを取得するためには、部局のセグメント管理者を通して情報処理センターに申請し、IPアドレスを割り当ててもらう。IPアドレスが取得できたら、情報コンセントとパソコンのEthernetポートを接続し、情報コンセントに割り当てられたIPアドレスをパソコン上で設定する。あらかじめTCP/IPのインストールが必要であるが、最近ほとんどのパソコンでプリインストールされている(もし追加が必要な場合は、使用しているOSのマニュアルを参照して追加する)。これでLANとインターネットの利用が可能になる。1つのコンセントで複数のコンピュータをLANに接続する場合は、Ethernet Hubと呼ばれる装置を導入する。2ポートから48ポートを超えるものまで、さまざまな数のポートを備えたHubがあるが、接続するコンピュータの台数に応じてHubを選んで(2~8程度で十分だ

ろう)導入し、必要な数のIPアドレスを申請する。もしパソコンにEthernetポートがない場合には、拡張スロットにEthernetボードを入れてポートを増設する必要がある。学内LANには、10BASE-TというEthernetの規格のポートならそのまま接続できる。これ以外の規格の10BASE-5や10BASE-2のポートしかない場合には、パソコン側の端子にトランシーバーという変換器を咬ませて10BASE-Tに変換してから情報コンセントに接続する。

当たり前のことだが、接続するためには情報コンセントとパソコンを結ぶツイストペアケーブルというケーブルが必要になる。ところが、一見すべて同じように見えるケーブルにも細かな規格の違いがある。これがまた初心者には間違いの元になる。今回ここで紹介しているように情報コンセントとパソコンを直結するためには“カテゴリー5のストレートケーブル”を使うこと。クロスケーブルというのを使うと、どんなに正しく設定してもネットワークへの接続は不可能である。クロスケーブルは、例えばHubを導入した場合やパソコン同士を直結する場合など、別の用途に使用するケーブルである。

### (3)サーバを手配する。

情報処理センターにお願いして、WWWサーバにホームページや画像ファイルを保存しておくためのハードディスク容量を割り当ててもらう。割り当てをもらうときには、割り当てに使うディレクトリ名とパスワードを申請する。割り当てられたパスワードは絶対に忘れないこと。また、セキュリティの面から考えて、むやみと公表しないこと。いつの間にか勝手にホームページの内容を書き換えられたりしないとも限らない。ホームページの作成自体は多人数でこなしていても、最後のサーバへの転送作業だけはある特定の人に限定するようにすればいい。

### (4)ホームページの作成に必要なソフトウェアを揃える。

まずホームページ作成用のソフト—HTMLエディタが必要である。HTMLをテキストエディタで打ち込めるようなら特に専用ソフトはいらないが、現在はHTMLエディタソフトがいくつも市販されているので、それを使う方が簡単だし、手間も省ける。画像を入れたい場合には画像処理用ソフトが必要になる。保存できる画像ファイルの形式としてJPEGとGIFをサポートしているソフトを選ぼう。その他、インタラクティブムービーを置きたい場合などは、それぞれの用途にあったソフトを揃えればよい。いわゆるメジャーな市販ソフトでなくてもよい。オンラインで配布されたり雑誌の付録のCD-ROMに収録されたりしているフリーウェアやシェアウェアにも優れたものがある。10数万もするソフトを買う前に、もっと安価で自分の使い道に合ったソフトがないかどうか、それを確かめておくとよい。

さらに作成したソフトをサーバに転送するためのFTPクライアントソフトも必要だ。Macintoshの場合はFetchというシェアウェアがある。Windows95にはFTPクライアントが標準で搭載されていて、TCP/IPをインストールするときなどに併せてインストールされる。Windows98にもある。端末からサーバにファイル転送することを“アップロード”(サーバ→端末はダウンロード)というが、アップロードしたホームページの動作を確認するために、ブラウザソフトも必要だ。言うまでもなくWindowsにはInternet Explorer(IE)が標準搭載されているし、MacintoshにはIEの他にNetscape Navigatorもバンドルされている(別途購入しなくてもパソコン本体に同梱されている)。最新版が欲しい場合は、いったん古いバージョンをインストールしてそれぞれのメーカーのホームページに行けば、最新バージョンをダウンロードすることができる。

### (5)下準備をする。

いきなりホームページを作り始めると、後からどうしても困ることが起きてくる。できあがったホームページをアップロードして、ブラウザソフトで確認したとしよう。あれれ、なぜか画像が出てこない。リンクしているテ

キストをクリックすると、おやFile Not Foundと言われてしまった。こんなことが起きるのである。なぜか？  
 実は、作成したHTMLファイルをアップロードする際にパソコンのハードディスク内でどういうふうに保存してあったか、あるいは作成したリンクがどういう書き方で参照されているかが重要なのである。“絶対参照と相対参照”と言われるものだ。簡単に言うとリンクされるファイルが、リンクを作成したいファイルから見てどういう位置(フォルダ階層)に保存されているかが、リンクを機能させるのに重要だということだ(Figure 1参照)。  
 サーバにアップロードするときに、パソコン側で保存した位置関係や階層関係をそっくりそのままアップロードしないと、上記のような“ファイルが行方不明”事態が起こる。このような事態を避けるためには、まず最初に画像ファイルのフォルダをまとめるとかHTMLファイルのフォルダをまとめるなどして、フォルダ内の階層構造などを決めてから、ホームページの作成に取りかかるのが賢明。

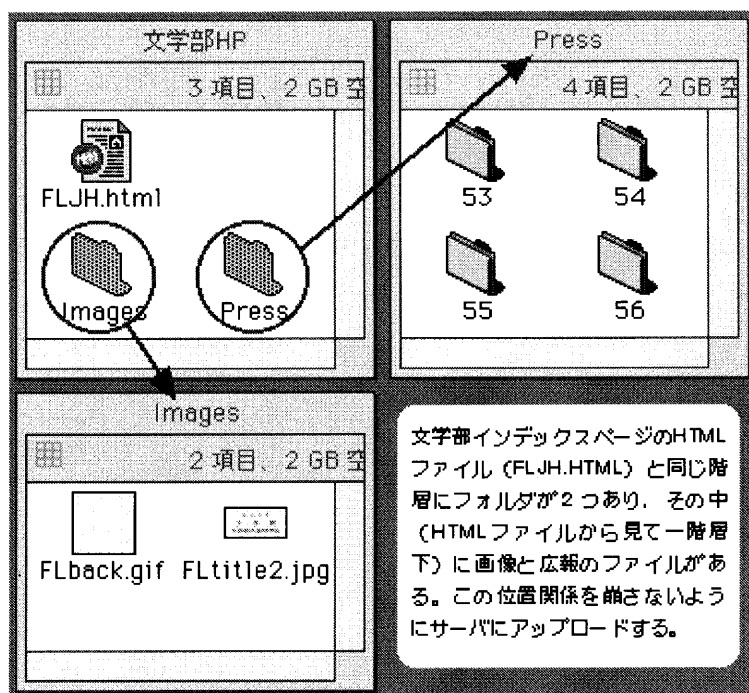


Fig. 1 パソコン上でのフォルダの階層構造の例。文学部のインデックスページを作成するときは、このような構造を決定してから作成している。

#### (6) 作成開始。まずはホームページに埋め込む素材から。

公開されているホームページを見ると、きれいな写真やカラフルな画像が貼りつけられている。これらはホームページにじかに埋め込まれているのではなく、あくまでそれぞれがひとつのファイルとして存在し、HTMLファイルの中で、提示する画像ファイルの名前やそのファイルのサーバ内での位置などが記述されているにすぎない。そこでまずこのような写真や画像を作成することから始める。作成した画像はそれぞれある決まった形式(フォーマット)で保存しなければならない。使い分けの基本は色数。写真など色数の多いものはJPEGフォーマット、256色レベルで十分な画像はGIFフォーマットで保存する(最近のデジタルカメラは、ほとんどの機種で撮影したデータの保存にJPEGフォーマットを使用している)。写真をGIFにすると色数を256色まで落とされてしまい、場合によっては見るも無惨な写真になってしまうので注意。また、JPEGには圧縮率というのがあって、低圧縮(あるいは圧縮無し)の画像はきれいだがファイルサイズが大きい(つまりファ

イルの読み込みに時間がかかる)。圧縮率が高くなるほどファイルサイズは小さくなるが、今度は画像の品質が低くなってしまふ。画像の内容に応じた圧縮率を選択しよう。もちろん、画像そのもののサイズも重要だ。当然、大きな画像ほどファイルサイズは大きくなる。必要な部分だけをトリミングするなどして、画像の大きさも調節しておこう。各書類のファイル名は、ひらがなやカタカナ、漢字、半角カナを使わずに、アルファベットでつける。最後に“.jpg”や“.gif”といった拡張子をつけておくのも忘れずに。Macユーザーは、絶対にPICT形式を使わないこと。Macユーザーが犯しがちなミスだ。様々なプラットフォーム(OS環境)から訪問してくる人がいることを忘れずに。最近では、著作権フリーの素材集CD-ROMなども販売されているので、それを利用するのもいいだろう。

著作権のことが出てきたついでに書いておくと、他人のホームページから画像や文章を転載する場合は、そのホームページの作成者がどういう著作権を主張しているかを確認して、連絡が必要な場合はきちんと連絡をとるように心がけよう。無断転載などは厳に慎むこと。もちろん、自分の作ったものについて著作権を主張し、転載についてのルールを一言書き添えておいても構わない。

#### (7)続いてHTMLファイル。

HTMLファイルはテキストエディタでも書ける。ただしそれはタグの記述や表示色を示すコード番号をすらすらと書ける人の話。初心者(に限るわけではないが)は、ホームページで見た通りにレイアウトできるホームページ作成ソフトを選ぶ方がいいだろう。これらのソフトを使えば、特にタグの内容を知らなくてもホームページを作ることができる。ただし、ある程度タグを知っておけば、そのソフトがサポートしないタグを自分で書き加えることもできる。完成したHTMLファイルには、やはりアルファベットで名前をつけ、ファイル名の最後に“.htm”または“.html”のいずれかの拡張子をつけて保存する。この拡張子をつけずにサーバにアップロードすると、ブラウザソフトで見ても、ただのタグとテキストの羅列が現れてくるだけで、リンクも機能しなければ画像も現れてこない。

前の項でMacユーザーに画像ファイルの形式を注意したが、HTMLファイルを作る場合にも気をつけなければならないことがある。今度は特にWindowsユーザー向け。Macからブラウズした場合に、文字化けして違う文字になるものがある。丸囲みの数字やローマ数字である。これはMacから見ると(月)とか(火)、(監)などと表示されてしまい、意味が通らないこともある。できれば使って欲しくない文字である。

ここまでできたら、HTMLエディタの中で、一度思った通りの動作をするかどうかを確認しておこう。ただし、自分たちの作ったページ間には行き来できるが、サーバにアップロードするまでは学外のホームページへのリンクなどが機能しないソフトもある。

#### (8)サーバにアップロードする。

画像ファイルもできた。HTMLファイルも作った。次はWWW上で公開するために、WWWサーバにアップロードしなければならない。最初の項に述べたように、情報処理センターで割り当ててもらったハードディスクに、ネットワーク経由でファイルを転送する。FTPクライアントソフトを起動して情報処理センターのWWWサーバにアクセスし、割り当てられているディレクトリに、ハードディスク内で保存したときの階層構造を変更しないように、そっくりそのまま転送する。階層構造を変えると、上述のようにFile Not Foundが頻発するなどのトラブルを抱えることになる。

例えば文学部のインデックスページをアップロードする場合を考えよう。文学部のインデックスページは、情報処理センターの“web”というサーバに載せている。サーバ内での場所は“web.kanazawa-u.ac.jp/home2/home3/workg13/letters/public\_html/”である(このディレクトリにアクセスするにはパスワード

が必要なので、このまま入力しても入れない)。FTPでここにアクセスし、パスワードを打ち込んで接続 (Figure 2参照)。index.htmlとそこに載せてある画像をアップロードする (Figure 3参照)。

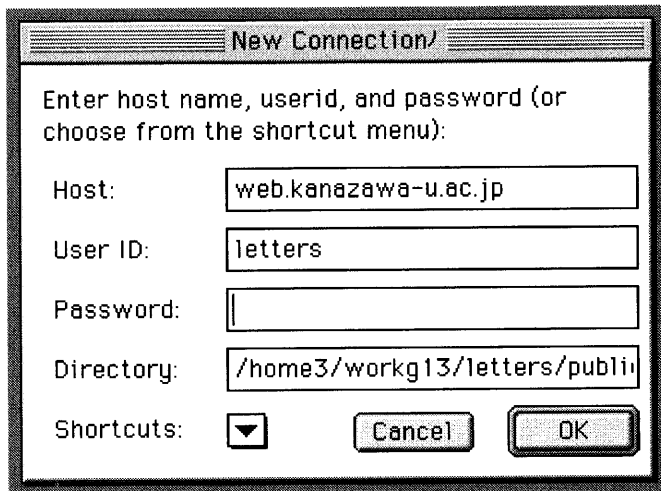


Fig. 2 サーバに接続する。図の例では、文学部のインデックスページが保存されているディレクトリへ、Mac 用の FTP クライアント Fetch で接続を開始しようとしている。

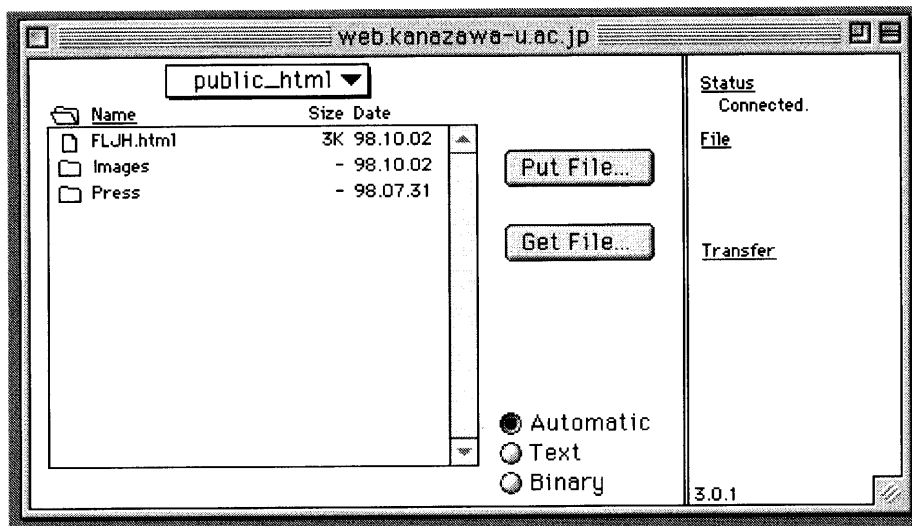


Fig. 3 アップロードが完了したところ。Figure 2 で示したディレクトリへ、Figure 1 で示した階層構造を変えないようにアップロードしてある。

#### (9)動作を確認する。

アップロードが終了したら、ただちにアップロードしたものがきちんと動作するかどうか、確認しよう。同じく文学部のインデックスページを例にとって説明する (Figure 4)。まず、ブラウザソフトを起動してURL (ホームページのアドレス) を入力する。文学部のインデックスページなら “http://web.kanazawa-u.ac.jp/~letters/index.html” である。先ほどの FTP の作業の際，“web.kanazawa-u.ac.jp/home2/home3/workg13/letters/public\_html/” に index.html を転送したのだから、URL は “http://web.kanazawa-u.ac.jp/home2/home3/workg13/letters/public\_html/index.html” となりそうだが、そうはならない。URL の中で “letters” の前にある “~ (チルトという記号)” をつければ、home2 以下、public\_html までを省略することができる。逆にこれをつけ忘れると、いつまで待ってもホームページは開いてくれない。



Fig. 4 Netscape Navigator で文学部のインデックスページを開いたところ。

“場所:”の欄に URL が示されている。

#### (10)更新する。

できたら終わり, というのでは意味がない。例えばリンク集を作っているのなら, リンク集に載せているページが移動していたり, リンク先が変わっていたりすれば, そこを書き換えなくてはならない。更新しないで同じ内容を掲示し続けているホームページには, 情報提供の場としての価値はないに等しい。作っただけで終わりにせず, 更新を続けていくことが大切だ。そこで, 更新についていくつか思うところを述べていきたい。

### 更新することの大切さ

ホームページを上手に利用すれば, 大学が発行するパンフレットよりも詳細でより身近に感じられる情報を発信できるというのは最初の方にも書いたとおりだが, そういった情報が載る大学の研究室のホームページには少なくとも2種類の有用性があると思う。ひとつはこれから大学や大学院を選ぶ人たちにに向けたガイダンスのページとしての有用性である。自分たちがこれから学ぼうとしている大学では何ができるのか, 本当に自分のやりたいことができるのか, といったような情報がこれに該当する。また, これらに加えて, 例えばそこを卒業するとどのような資格が得られるのか, 逆にある職業に就くために必要な資格が得られるのかどうか, というような, 入学してみるまではわかりにくい情報を提供することもできる。もちろん, 入学した後で, 専門で何をやるかを選ぶとする学生にとっても同じように役に立つ情報だ。もうひとつは研究機関のページとしての有用性である。各研究室の専門分野について提供する情報は, 例えば専門のサイトを集めたリンク集, 研究室のメンバーが扱っている研究テーマに関する著作の紹介, あるいは自らの研究や著作・論文の紹介といった, より専門性の高い情報である。同じような研究分野で活動している人に向けた情報だ。

しかし, どんなに役立つ情報であっても, それがいつのもののなのかがその情報の価値を決めることになる。例えば, 講義の内容なら, 1年間を通しておこなわれる講義もあるが, 半期で入れ替わるものもある。年と共に大学院のメンバーにも変化が出て, 新しい分野を開拓する人が出てくるかもしれない。卒業生の就職状況にしても, 毎年同じようになるとは限らない。大学を選ぶときに参考にするような情報はなるべく新しい方がいいに決まっている。大学院を選ぶときには自分がそこで研究していくに当たって, きちんと指導を受けられるのか, 自分と似たようなテーマで研究を進めている人がいるのかいないのか, などが重要になってくる。そうなったとき, もうすでにその研究室にいない人のデータを教えてもらっても, 何の役にも立たない。ホームペ

ージを上手に運営するということは、情報を更新する手間を惜しまない、ということでもある。

もちろん、更新頻度にも程度というものがある。どう頑張っても就職状況のデータや進学状況のデータは年に1回しか手に入らない。それを月1回のペースで更新するのは無意味だ。講義の内容にしても、毎週の進み具合を一般公開しても仕方がない。一方、各自の研究は日経てばそれだけ進むわけだから、毎日とは言わないまでも、2カ月か3カ月に一度ぐらいは更新していけるだろう。つまり発信する情報の性質によって、更新の間隔は決まってくると言える。

## “立て看板”と“電光掲示板”

大学の公式ホームページは、その研究室の看板としての役割を担うことになる。私はこの看板には2つのモードがあると考えている。ひとつは“立て看板”モード。研究室の概要や教官の紹介、講義の紹介など、比較的固定された情報を載せる看板である。これはどちらかというと、一度読めばOKの宣伝用であると言っていいだろう。例えば受験生や専門コースを選ぼうとする学生に対しては、こちらの役割の方が大きい。更新の頻度はそれほど頻繁でなくてもよい。改訂されるべきときに確実に改訂されればいいのである。

そしてもうひとつは“電光掲示板”モードである。街頭でニュースや広告を流している電光掲示板を見たことがあると思うが、あれと同じ役割をホームページだって果たせるのではないだろうか。もちろんあのように次々と新しいニュースを流す、と言うのではなくて、比較的頻繁に更新される情報の発信基盤になるという意味だ。これは研究室のメンバー各自が情報発信するのに使える。大学院生ならば、自分が研究発表に出かける学会で、いつ、どこで、どんな発表をするかを知らせることもできる。専門コースに関連のある研究会や講演会が催されるときには、そのアナウンスもできる。“立て看板”モードよりは頻繁に更新されるべきページである。この2つのモードを上手に使い分けることによって、そのホームページは更新が滞ったままにならない、生きたページになっていくはずだ。

## 誰がやるのか？ —今後に向けて—

ホームページは立ち上げるのも一苦労だが、むしろ大切なのは立ち上げた後にどのように維持していくかだと思う。大学の専用線環境からホームページを見る場合と違って、ダイヤルアップで接続している人にとっては、ホームページ経由で情報を入手するにはお金がかかる。どんな情報をどの程度の頻度で更新しながら発信していくか、ここがキーポイントになる。文学部では、現在のところ、心理学、社会学、比較思想、西洋史、地理学、仏文、独文の各研究室がホームページを開設している。研究室紹介ばかりではなく、教官や学生のホームページを開設しているところもある。ただ更新されずに放っておかれているところもあるようだ。なぜか？ 更新する材料がないから？ 私はそうではないと思う。ひょっとしたら、数名の研究室のメンバーしかホームページの制作に関わっていないのではないのだろうか。その人たちが止めてしまうと、更新がストップしてしまうのではないだろうか。

ホームページを作る、というのはHTMLを書いてWWWサーバへ転送することではない。充実したコンテンツを提供することだ。実際にHTMLをさわらなくても、アイデアを出す、コンテンツの材料を提案する、場合によっては、HTMLにする前の記事の下書きをするなど、コンピュータが使えなくても参加可能なことはいくつもある。HTMLを書ける、コンピュータに詳しい、そういう人に任せきりにしなくても、材料の提供という形で

参加することもできるのだ。そして、少しでも自分でHTMLが理解できるようになったら、今度は自分のページを自分自身で開設して、自分自身で更新していく、ということに挑戦していけばいい。そのためにもすべてを人任せにしない、という姿勢が必要だろう。ネットワーク利用が大学に限らずビジネスシーンでも重要な役割を果たしている今日、わずかながらでもそういう知識を持つておくことは、決して損にはならないはずだ。今後、あちこちの研究室で自主的に参加する人が増えてくることを望む。そうやってホームページの開設が進むことが、活発な利用を引き出すことになると思うからである。